yamabuki 通信

No.２８
平成１９年６月２８日
情報教育アドバイザー
広田　さち子

yamabuki は、『小学校でのパソコン授業』の URL より
パソコン室から　不定期　発行

相手意識

情報の向こうには、必ずだれかいる。これが「相手意識」です。

受け取るときには、その、誰かの意図を慮（おもんぱか）ることが必要です。発信するときには、受け取る（かもしれない）人のことを十分考慮しなくてはなりません。適切に伝え、受け取るためには、相手を意識することが不可欠です。

情報教育、というのは、この、「相手意識」を学ぶことに他なりません。

相手意識で特に重要なのが、相手が目の前にいない場合です。その中でもとりわけ「相手がわからない」ときに、どれだけ相手意識を持てるかが、情報教育として押さえておかなくてはならない点になります。受信も発信も同じです。

昔は、ほとんど対面での相手しかありませんでしたが、今は違います。

受診であれば、インターネットだけではなく、ラジオ・テレビといった放送メディア、新聞や書籍などの出版物、ポスターやチラシなどの広告媒体など、実にさまざまな形で、見えない相手から情報が届けられます。それぞれ、生の情報に発信者の意図というフィルタがかけられたものが届きます。情報の洪水、と言ってもいいでしょう。受信者の好みや余裕のあるなしにかかわらず、身の回りにはこういった情報があふれています。

受け取る情報には生の情報に発信者の加工が加わっている、ということを学ばねばなりません。

発信はもっと昔と違います。今は「誰でも」その気になれば、全世界の人に向けての発信が可能になりました。

メールだと気軽に書ける、面と向かって言えないこともメールなら書ける、と若い人達が言うのは、相手が見えないことから、受け取る人を思いやることに思いが及ばないせいです。

歴史や伝記本がマンガになり、参考書もどのページにもイラストが満載です。子どもたちは、自分でイメージしなくてはならない場面に遭遇することが少なくなりました。勢い、情報を受け取る人の気持ちを思いやること、もっと言えば、情報の向こうに生身の人がいることすら忘れて気の向くままに発信してしまいます。

相手の立場に立ってみる、ということは、相手が目の前にいるときだけでなく、むしろ、見えない相手にこそ気を遣っていくことです。発信するときの気持ちの持ち方を学ぶことで、世の中がぎすぎすするのを避けることができます。